

<特集「モダリティ」>

イタリア語におけるモダリティ Modality in Italian

土肥 篤
Atsushi Dohi

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 特集「モダリティ」におけるアンケートに回答する形式でイタリア語の例文を提示し、コメントをつける。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on modality in *Journal of the Institute of Language Research* 16, 2011, Tokyo University of Foreign Studies with Italian data.

キーワード: モダリティ、イタリア語

Keywords: Modality, Italian

1. はじめに

イタリア語におけるモダリティ (*modalità*) は、本特集まえがき (風間 2011) も言及する Palmer (2001) をはじめとした「欧米」的な枠組みで研究されてきたものの典型例の一つであると言える。その結果として、イタリア語におけるモダリティ研究といった場合、命題的・事象的なモダリティおよびしばしばそれらと密接に関わる動詞の法 (*modi verbali*)、および法助動詞 (*verbi modali*) を中心として論じられることが多い (たとえば、Pietrandrea 2005)。今回のアンケートに対する回答でも、こうした意味機能が基本的には動詞の活用および特定の法助動詞の使用と結びつくことが確認できた。

一方で、モダリティを広義に、すなわち話し手の命題に対する態度一般としてとると、多様な要素がモダリティ的な意味を表し得る。今回のアンケートに対する回答では、副詞や特定の語彙の使用が意図されたモダリティの意味に対応していることがあった。

以下では、2.としてアンケートへの回答¹とそれぞれの文の簡単な解説を示す。

2. アンケートの回答

(1) (その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。

(Quando avrai	finito	di	lavorare)	potrai	andare	a
When have.2SG.FUT	finished	of	work	can.2SG.FUT	go	to
casa.						
home						



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ アンケートへの回答にあたっては Diego Cucinelli 氏 (Università degli Studi di Firenze) にご協力いただいた。ここに感謝申し上げる。データの解釈における不備は、すべて筆者の責任である。

法助動詞の一つであり、可能性を表す *potere* 「～できる」を使って表現するのが最も自然であろうと思われる。*potere* は同様に「できる」と訳されることの多い *sapere* のほか、*riuscire a* や *essere in grado di* といった表現と異なる分布を持ち、一般的に状況可能を表すと言われる。

(2) (腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない／それを食べるな。

- | | |
|----|-----------------------------------|
| a. | (È andato a male!) Non mangiarlo! |
| | is gone to bad NEG eat.it |
| b. | Non puoi mangiarlo. |
| | NEG can.2SG eat.it |
| c. | Non devi mangiarlo. |
| | NEG must.2SG eat.it |

最もシンプルな表現は、(2a)のように否定命令を使うものであろう。一方で、(1)でも用いた法助動詞 *potere* を使い、否定形にした(2b)や、同じく法助動詞で義務を表す *dovere* を否定形にした(2c)も用いることができる。

(3) (遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない。

- | |
|-----------------------------------------------------|
| (Per noi si è fatto tardi), dobbiamo andare a casa. |
| for us CLT is done late must.1PL go to home |

(2c)と同様、義務を表す法助動詞 *dovere* を使う。

(4) (雨が降るそうだから) 傘を持って出かけたほうがいいよ。

- | | |
|----|-------------------------------------------------------------|
| a. | (Pare che pioverà), portati un ombrello. |
| | Seem that rain.3SG.FUT bring.yourself.IMP a umbrella |
| b. | (Dovrebbe piovere.) Faresti meglio a portarti |
| | Must.3SG.COND rain do.2SG.COND better to bring.yourself.INF |
| | un ombrello. |
| | a umbrella |

(2)と同様に、単に命令法を使うことでも助言のニュアンスを伝えることができる。一方、助言に特化した形式としては(4b)のように動詞 *fare* 「する」を条件法 (*condizionale*) に活用させ、*meglio* 「より良く」と組み合わせた表現が使われることがある。他のロマンス語と同様、イタリア語の条件法は主に主節で現実・非現実の対立における後者に対応し²、明示的または非明示的な条件のもとに実現する仮定を表す。(4b)のような助言に現れる条件法は、しばしば「聞き手は傘を持っていくのが良い」という内容を仮定として提示することで語調を緩和する用法であると説明される。

(5) 歳をとったら、子供の言うことを聞くべきだ／聞くものだ。

- | |
|-----------------------------------------------------|
| Quando si arriva ad una certa età, sarebbe meglio |
| when CLT arrive to a certain age be.3SG.COND better |

² なお、同様に非現実に対応する接続法 (*congiuntivo*) は主に従属節に現れる。

prestare	orecchio	a	quanto	dicono	i	più	giovani
lend	ear	to	what	say.3PL	the	more	young

(4)と同様、条件法を用いた表現が自然である。(4)のような聞き手への助言との違いは、単に人称の違いとして現れる。イタリア語ではこうした、特定の指示物を持たず一般的な内容を表す表現を総称して非人称 (impersonale) と呼ぶことがある。この文では副詞節にも現れている接辞 *si* や、不定法の動詞 (ここでは *prestare*) を使った節を主語とした *sarebbe meglio* 以下が非人称の表現にあたる。なお、*sarebbe meglio* の代わりに同様に不定法の主語をとり、かつ条件法に活用した *bisognerebbe* (原形 *bisognare* 「～すべきである」) や、義務を表す法助動詞と接辞 *si* を使って同様に条件法にした *si dovrebbe* を用いることもできる。いずれの場合も、条件法の持つ語調緩和によって相手を特定しない一般的な助言として機能していると言える。

(6) お腹が空いたので、(私は) 何か食べたい。

a.	Ho	fame.	Vorrei	mettere	qualcosa	sotto	i	denti.
	have.1SG	hunger	want.1SG.COND	put	something	under	the	teeth

(4-5)と同様に、条件法を使った表現が自然であろうと思われる。願望を表す法助動詞 *volere* 「～したい」は特に一人称単数でしばしば条件法で現れる。これは願望を条件付きの仮定として提示することで丁寧に表示するため、やはり語調緩和の一種と言える。なお *volere* を使わず、(6b)のように一人称複数の疑問文にすることや、(6c)のように *mangiare* 「食べる」を条件法にして婉曲に表現することも可能である。

b.	Mangiamoci	qualcosa?
	eat.ourselves.1PL	something
c.	Mangerei	volentieri qualcosa.
	eat.1SG.COND	gladly something

(7) 私が持ちましょう。

Dallo	pure	a	me,	lo porto	io!
give.it.IMP	also	to	me	it carry.1SG	I

イタリア語には、こうしたモダリティに直接対応する形式がない。そこで、いったん命令法を使って「それを渡してくれ」と言ったのち、「持つ」は単に直説法一人称単数で表されることになる。なお、ここでは *pure* という副詞が命令文に現れる。この副詞は命令文を命令ではなく許可に類するものに変える働きがあり、ドイツ語における心態詞との類似性が指摘されている (Coniglio 2008 を参照)。

(8) じゃあ、一緒に昼ご飯を食べましょう。

Dai,	andiamo	a	pranzo	insieme.
c'mon	go.1PL.IMP	to	lunch	together

勧誘は、命令法一人称複数形で表現される。直説法現在と同形である。

- (9) 一緒に昼ご飯を食べませんか？
 a. Pranziamo insieme?
 have.lunch.1PL together

単に直説法現在一人称単数を用いた疑問文が最も自然であろうと思われる。イタリア語では、否定の要素は現れない。なお、se「もし」を使った表現も可能である。この場合には、接続法半過去を使う³。

- b. Ma se pranzassimo insieme?
 but if have.lunch.1PL.SBJV.IPFV together

- (10) 明日、良い天気になるといいなあ。／明日は良い天気になってほしいなあ。
 Spero che domani faccia bel tempo.
 hope.1SG that tomorrow do.3SG.SBJV beautiful weather

動詞 sperare「望む」を使う。従属節における動詞は接続法の形をとる。

- (11) (私はここで待っているから) すぐにそれを持って来なさい。
 Vammelo subito a prendere, ti aspetto qui.
 Go.to.me.it.IMP soon to take you wait.1SG here

命令法を用いる。イタリア語では、二人称単数のみ命令法に固有の形式を用いる (Zanuttini 1994 のいう true imperative)。

- (12) そのペンをちょっと貸していただけませんか？
 Potrebbe prestarmi quella penna, per favore?
 can.3SG.COND lend.to.me that pen for favor

可能性を表す法助動詞 potere を用いた疑問文で表される。さらに、動詞は敬称の lei「あなた」に対応する三人称単数かつ語調緩和の条件法に活用し、文末には per favore「どうか」が付け足される。これらの要素は文の丁寧さを増し、「懇願」のニュアンスを補強することには貢献していると言える。

- (13) あの人は中国語が読めます。／あの人は中国語を読むことができます。
 a. Quella persona è in grado di leggere il cinese.
 that person is in grade of read the Chinese
 b. Quella persona sa leggere il cinese.
 know.3SG
 c. Quella persona legge il cinese.
 read.3SG

能力可能は動詞 essere「である」を使った essere in grado di や sapere「知る、できる」を使って表され

³ 半過去 imperfetto は、いわゆる未完了過去に相当する。

る。ここでは、potere は使えない。なお、日本語と同様に「あの人は日本語を読む」(13c)としても同様に能力に言及することができる。

- (14) 明かりが暗くて、ここに何が書いてあるのか、読めない。
- | | | | | | | | | |
|------|-------|----------|----------|-----|-----|-------------|----|---------|
| La | luce | è | fioca | e | non | riesco | a | leggere |
| the | light | is | dim | and | NEG | succeed.1SG | to | read |
| bene | cosa | c'è | scritto. | | | | | |
| well | what | there.is | written | | | | | |

ここでの可能は a+不定詞を伴う動詞 riuscire「成功する、できる」を使って表現される。potere や sapere は使えない。

- (15) (朝早く出発したから) 彼らはもう着いているはずだ/もう着いたに違いない。
- a.
- | | | | | | | |
|------------------|--------------|---------|----|--------|------|------|
| (Essendo partiti | stamattina | presto) | di | sicuro | loro | sono |
| being left | this.morning | early | of | sure | they | are |
| già | arrivati | | | | | |
| already | arrived | | | | | |

ここから(18)までの実現可能性を示す諸表現は、イタリア語では一つのパラダイムをなしているとは言い難い。(15)のような確信は、ふつう副詞節 di sicuro「間違いなく」で表される。また、この文のように蓋然性が比較的高い推論という程度であれば probabilmente「おそらく」も自然であろう。

確信のニュアンスは法助動詞 dovere でも表すことができる。この場合にも、(15b)のようにより強い確信を表す直説法を使うことも、(15c)のように語調緩和の条件法を用いて直説法と比べれば弱い確信を表すこともできる。

- b.
- | | | | |
|--------------|--------|---------|-----------|
| Devono | essere | già | arrivati. |
| must.3PL.IND | be | already | arrived |
- c.
- | |
|---------------------------------|
| Dovrebbero essere già arrivati. |
| must.3PL.COND |

- (16) (あの人は) 明日はたぶん来ないだろう。
- | | | | | | |
|----------------|--------|----------|-----|--------------------|----------|
| (Probabilmente | quella | persona) | non | verrà ⁴ | domani. |
| probably | that | person | NEG | come.3SG.FUT | tomorrow |

ここでも同様に、副詞による表現が該当する。probabilmente の他には、同じく確信というほどではな

⁴ ここで用いられている直説法未来はそれ自体が(i)のように話し手による推測を表すことがあるが、この用法は発話の時点に対して言及する時にしか使えない。これに対して、(16)における verrà は単に未来のことを表すために使われている。なお、(16)の verrà は未来のことを表すこともできる直説法現在 viene に置き換えることが可能だが、domani「明日」があることで明示的に未来であることが示されているために学校文法ではふさわしくない形であるとされる。

(i) Ora saranno le tre.
「今は三時だろう。」(Salvi & Vanelli 2004: 117)

いが比較的高い可能性を表す *forse* や話し手の主観的であることを表す *secondo me* 「私によれば」を使ったり、文全体を *non penso che* 「～とは思わない」の従属節に入れてしまうことも可能である。従属節に入れる場合には、動詞は接続法に活用する。

(17) 彼らはまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。

a. Se non sono ancora arrivati, forse hanno avuto un
 if NEG are.3PL yet arrived maybe have.3PL had a
 problema alla macchina lungo il tragitto.
 problem at.the car along the way

(15)や(16)同様に、副詞によって表されるのが通常である。*forse* は(16)にも使うことができ、推量と疑念の差はイタリア語でははっきりとした言語形式で現れない。ただし、否定疑問の形で疑念であることを明示した次の(17b)も可能である。こうした *non + essere + che* 「～ではない(か)」の従属節では、接続法が使われる。また、(17b)では主節の *essere* が直説法未来に活用している。これは直説法未来が現在における不確実な内容を表すことができるため、疑念のニュアンスを補強している。

b. Non sarà che abbiamo avuto un
 neg be.3SG.FUT that have.3PL.SBJV had a
 problema alla macchina lungo il tragitto?
 problem at.the car along the way

(18) (昼間だからあの人は家に) さあ、いるかもしれないし、いないかもしれない。

a. A quest'ora di giorno, chissà, forse è in
 at this.time of day who.knows maybe is in
 casa o forse no
 home or maybe NEG

b. A quest'ora di giorno, potrebbe darsi che ci sia
 can.3SG.COND give.itself that there is.SBJV
 oppure che non ci sia.
 or that NEG there is.SBJV

c. A quest'ora di giorno, potrebbe essere in casa così come
 can.3SG.COND be in home so as
 no.
 NEG

様々な表現が考えられるが、日本語のニュアンスを忠実に再現しようとするといずれの場合にも「家にいる」と「家にいない」のどちらもありえる、ということを示的に表すことになる。なお、こうした表現はいずれも翻訳調で、あまり自然ではない。イタリア語では、肯定または否定に判断を寄せた次の(18d)のような文(「この時間には、彼は家にいないかもしれない。どうだろう…」)の方が自然だと言える。

d. A quest'ora di giorno, difficile che lui sia in casa,
difficult that he is.SBJV in home
chissà...
who.knows

(19) (額に触ってみて) どうもあなたは熱があるようだ。

Mi sa che hai la febbre.
me.DAT know.3SG that have.2SG.IND the fever

イタリア語では視覚による判断を表す *sembrare* 「～に見える」という動詞 (cf. 英 *seem*) があるが、こうした文では *sembrare* は使えない。ここでは動詞 *sapere* が間接補語を伴って「～のようだ、～という印象がある」という意味を表す表現で表されている。なお、この表現における従属節には接続法ではなく直説法が使われることが多い。ただし、Moretti & Orvieto (1984) がすでに指摘しているように、少なくともこの構文における直説法の使用は当該表現がどちらかといえば口語的なものであることを示しているに過ぎず、現実と非現実の対立における前者を表現しているとは言い難い⁵。

(20) (天気予報によれば) 明日は雨が降るそうだ。

Stando al meteo, domani dovrebbe piovere.
standing to.the weather tomorrow must.3SG.COND rain

ある内容が伝聞であることは、「～によれば」という副詞節があることで表される。この文にある *stando a* の他に、同じ意味を表す *secondo* を使うことも可能である。

(21) もしお金があったら、あの車を買うんだけどなあ。

Se avessi soldi, certo, comprerei volentieri quella
if have.1SG.SBJV.IPFV money sure buy.1SG.COND.PRS gladly that
macchina.
car

現在の事実に反する仮定とそこから導かれる帰結は、主節と従属節それぞれの動詞を直説法でない法に活用させて表現される⁶。具体的には、主節は条件法現在に、従属節は接続法半過去に活用する。

(22) もしあなたが教えてくれていなかったら、私はそこにたどり着けなかったでしょう。

a. Se tu non mi avessi indicato la strada,
if you NEG me.DAT have.2SG.SBJV.IPFV indicated the way
non ci sarei mai arrivato.
NEG there be.1SG.COND.PRS never arrived

⁵ これは、現代イタリア語において接続法が衰退しているとする、いわゆる「接続法の死」 *morte del congiuntivo* と呼ばれる現象と関連している。この点について概観した比較的近年の研究に Schena, Prandi & Mazzoleni (2002) がある。

⁶ なおイタリア語では、事実に反する仮定と単に可能性の低い仮定を文法上区別しない。仮定があり得るけれども可能性が低いのか事実に反しているのかは、聞き手の推論に委ねられる。

過去の反実仮想は、(21)のような現在における反実仮想の主節と従属節それぞれの動詞を複合過去の形にすることで得られる。複合過去とは、助動詞（essere “be”または avere “have”）＋過去分詞の形のことである。(22a)では、主節が助動詞 essere の条件法現在と動詞 arrivare 「着く」の過去分詞 arrivato で作られる複合過去である条件法過去、従属節が助動詞 avere の接続法半過去 avessi と動詞 indicare 「指し示す」の過去分詞 indicato で作られる複合過去である接続法大過去に活用している。

なお、特に口語においては比較的単純な形態をした直説法半過去が代わりに用いられることがある。

b. Se non mi indicavi la strada, non ci arrivavo mai.
 indicate.2SG.IND.IPFV arrive.1SG.IND.IPFV

(23) (あの人は) 街へ行きたがっている。
 (Lui/lei) vuole visitare la città.
 he/she want.3SG visit the city

一人称や二人称の希望と同様に、願望を表す法助動詞 volere を使う。

(24) 僕にもそれを少し飲ませろ。
 Fammene assaggiare un po’.
 make.me.of.it taste a little

使役動詞 fare を使った命令文で表すのが自然である。fare は、通常の動詞としては英語の do に対応する「する」や「作る」といった意味を持つ。

(25) これはあの人に持って行かせろ／持って行かせよう。
 Fallo portare a lui.
 make.it carry to him

(24)と同様、使役動詞 fare を使った命令文が自然である。

(26) そのテーブルの上のお菓子は後で食べなさい。
 I dolci sul tavolo, mangiali più tardi.
 the desserts on.the table eat.them more late

イタリア語では、命令法に近未来と遠未来の対立は存在しない。「後で」は副詞節で表現される。

(27) もっと早く来ればよかった。
 a. Sarei dovuto venire prima.
 be.1SG.COND must come before
 b. Avrei fatto meglio a venire.
 have.1SG.COND done better to come

(22)と同様に動詞が条件法過去に活用し、条件節の省略された文として表現される。なお(22)と同じく、特に口語では条件法過去のかわりに直説法半過去が使われることがある。

- (28) あなたも一緒に行ったら (どうですか) ?
Ma se venissi con noi anche tu?
but if come2SG.SBJV.IPFV with us also you

主節が置かれず、se「もし」に導かれた節だけから成る文が可能である。動詞は、接続法半過去に活用する。

- (29) オレがそんなこと知るか!
Ma che ne so io?
but what of.it know.1SG I

日本語では疑問詞を伴わないが、イタリア語では疑問詞 *che* を用いたこのような表現が最も自然に対応していると思われる。直訳すれば「そのことについて私が何を知っているのか?」となる。

- (30) これを作った (料理した) のは、お母さんだよな? / いいえ、私が作ったのよ。
L'ha cucinato tua mamma, vero?
it.have.3SG cooked your mother right
No, l'ho fatto io.
no it.have.1SG done I

付加疑問は、*vero* の他には同じく英 *right* に相当する *giusto* や *not* に対応する *no* によっても表すことができる。

参考文献

欧文

- Orvieto, Giorgio R. & Moretti, Giovanni B. 1984. *Grammatica italiana*, Vol. 1, Perugia: Benucci.
Palmer, Frank R. 2001. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
Pietrandrea, Paola. 2005. *Epistemic Modality: Functional Properties and the Italian System*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
Salvi, Giampaolo & Vanelli, Laura. 2004. *Nuova grammatica italiana*. Bologna: Il Mulino.
Schena, Leo, Michele Prandi & Marco Mazzoleni (eds.). 2002. *Intorno al congiuntivo*. Bologna: CLUEB.

和文

- 風間伸次郎. 2011. 「テーマ企画: 特集 モダリティ まえがき」, 『東京外国語大学語学研究所論集』16, pp.29-55.

執筆者連絡先: atsushi.dohi@tufs.ac.jp

原稿受理: 2021年12月27日